続　いのちの伝言

―私の戦争体験より―

桶川市平和都市宣言

恒久平和は、人類共通の念願である。

しかるに、大国間における核軍備の拡張はますます強まり、世界平和、人類の生存に深刻な脅威をもたらしている。

我々は、世界最初の核被爆国民として、今なお続く被爆者の苦しみを思うとき、この地球上に再び、ヒロシマ・ナガサキの惨禍を繰り返さないことを、全世界の人びとに訴える。

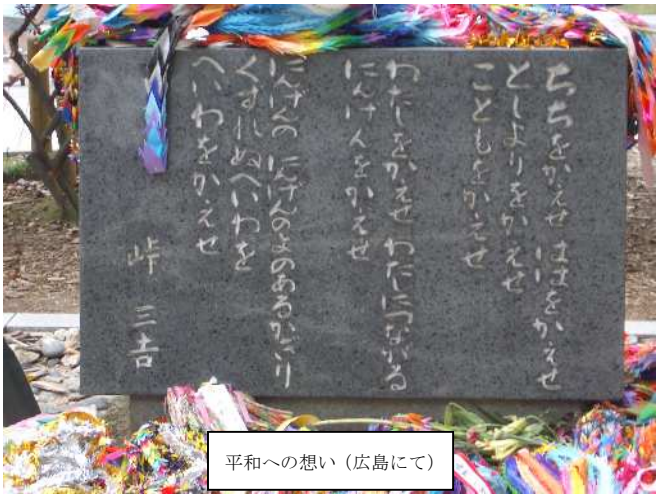
我々は、恒久平和を求める立場から、非核三原則を守り、すべての核保有国に対し、核兵器廃絶を求めるとともに、軍備の縮小を強く要求するものである。

ここに桶川市は、平和への誓いを新たにし、厳粛に平和都市を宣言する。

昭和60年1月1日

桶　川　市

ヒロシマで



平和への想い（広島にて）

（上）原爆の子の像
（左）平成 17 年度「平和のメッセンジャー」原爆ドームの前で
（右）原爆の子の像に捧げた市民からの折り鶴

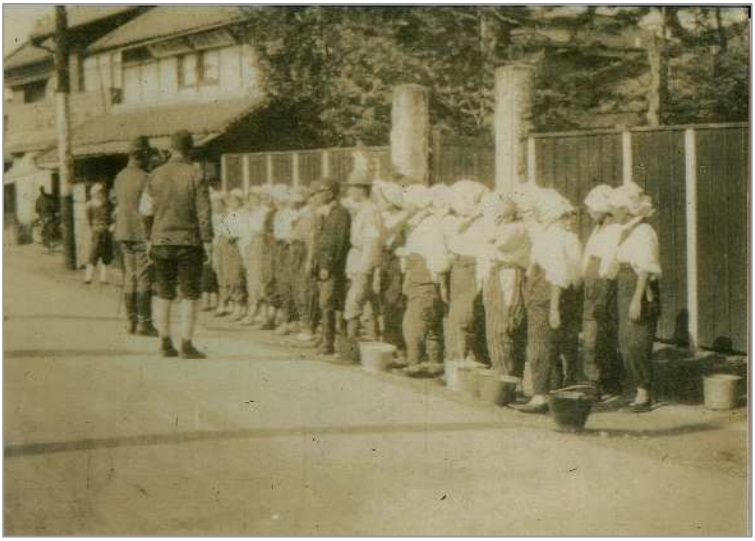
学童疎開

疎開地で毎朝行われたラジオ体操

疎開地での食事の様子。奥に立っている一番右が、写真提供者の中山郁子さん（故人）

本文 49 ページ

防災訓練



整列して説明を受ける住民　　写真提供：櫻井興治さん

はしごで屋根に登り、バケツリレーでの消火訓練　　写真提供：櫻井興治さん

(左・上)　バケツリレーによる消火訓練

(下) 山口屋呉服店前で消防車を使っての訓練

（写真提供：櫻井興治さん）

結婚式

昭和 18 年当時の結婚式　（お嫁さんの前の少年が写真提供者の中村成夫さん）　本文 69 ページ

桶川飛行場

川田谷にあった熊谷陸軍飛行学校桶川分教場（旧陸軍桶川飛行学校）の訓練生による訓練風景
（写真提供：臼田智子さん）　本文 61 ページ

第 79 振武特別攻撃隊が桶川飛行場から飛び立った

本文 61 ページ

（写真提供：多田雄一さん）

広島平和記念式典での鳩

「続　いのちの伝言 ― 私の戦争体験より ―」発刊によせて

桶川市長　岩崎正男

昨年、戦後六十年が過ぎ、戦争を知らない世代の割合が増え、戦争を記憶として語ることのできる戦争体験者の数は、ますます減ってきております。「記憶から記録へ。」体験者の記憶を記録として残す、戦争体験記。このことは、世界平和を脅かす紛争が世界各地で起こっている今日、戦争の愚かさと平和の尊さを考え、確かめ、次代を担う子どもたちに伝えることの大切さを教えてくれます。

平和を願う事業として昭和五十七年に始めた「平和を考える十日間」の事業も今年で二十五回目となります。桶川市では、毎年八月六日、九日の広島、

長崎の原爆投下時刻、十五日の終戦記念日の正午に、市内全域にサイレンを吹鳴して黙とうを呼びかけています。また、広島の平和記念式典には、平和のメッセンジャーとして中学生を派遣し、市民の皆さんから託された千羽鶴をささげてきました。

そのような中、昭和六十二年から始めた「戦争体験記」の募集も平成七年までの原稿をまとめた、前作「いのちの伝言―　私の戦争体験より　―」から十年が経過し、その間も多くの人からさまざまな体験をお寄せいただきました。このたび、平成八年から今年度まで「広報おけがわ」に掲載された原稿を、「続　いのちの伝言―　私の戦争体験より　―」として、まとめました。

ここに、体験記をお寄せくださいました方々に改めて感謝申し上げると共に、この機会に多くの市民の皆さんにお読みいただき、「過ちは繰り返してはいけない。」という言葉の意味を、特に戦争を知らない世代の皆さんに感じていただきたいと心から望むところでございます。

平成十八年　八月

目　次

平成8年度（一九九六）

若い人に戦争の悲惨さを　伝え残したい　岡田　愛子……1

平成9年度（一九九七）

セレベス海の悪夢　齋藤　兼英……2

少年の目で見た　終戦時の川田谷　砂川　義信……5

敗戦の惨めさ　食糧難　宮内　洋子……8

私の戦争体験記　前田　猛……11

沃丁（ようちん）従軍記　小川　敏治……14

平成10年度（一九九八）

モンゴルに抑留されて　金子　保夫……18

私の十一歳　砂川　春……22

平成11年度（一九九九）

私の青春　堂前　絹代……25
じゃがいもの味　山崎　幸勇……28
平和への願い　斉藤　勝……31
防空隊の末路　町田　好市……33

平成12年度（二〇〇〇）

異国の衛生兵　金子　武義……37
食料難をのり越えて　森　敏五郎……40
思い出の地　前島　芳春……43

平成13年度（二〇〇一）

戦争の悲惨さを繰り返してはならない　安川武之助……46

平成14年度（二〇〇二）

学童集団疎開を引率して　中山　郁子（故人）……49

平成15年度（二〇〇三）

戦争覚書　湯本　嘉次……52

平成16年度（二〇〇四）

東京大空襲　本木　茂子……56

昭和20年4月5日　桶川飛行場　柳井　政徳……61

平成17年度（二〇〇五）

3月10日　東京大空襲　伊藤　宏子……66

昭和20年3月10日　東京本所厩橋　中村　成夫……69

忘れられない兄　岡安　智恵……73

あれから60年　筧　芳江……77

「続　いのちの伝言」

幼い目から見た戦争体験記　森　敏五郎……82

平成18年度（二〇〇六）

戦争のない平和を願う一人として　金子美代子……85

「平和」　なんと素晴らしい言葉だろう　藤森　巳代……88

続　いのちの伝言

―　私の戦争体験より　―

平成8年度

（この年は、前年度に体験をお寄せいただいた方からの声を掲載しました）

若い人に戦争の悲惨さを　伝え残したい

岡　田　愛　子
上日出谷在住

終戦当時、私は大分県に住んでいて、小学校六年生でした。主食は配給のコウリャン※で、おかゆにして食べていました。常に空腹で、毎日毎晩の空爆を避けて〝防空壕〟に逃げ込む・・・という生活でした。あの恐ろしい記憶は、忘れられません。

いまだに世界中のあちこちで、戦争や紛争が起きていますが、戦争は殺し合いと破壊以外の何ものでもありません。争いが絶えないことが残念でなりません。

※　コウリャン・・イネ科の植物で、モロコシの一種。穀粒が食用になる。

平成9年度
セレベス海の悪夢

齋藤兼英
下日出谷在住

「雷跡（らいせき）――！　雷跡――！」

対潜監視哨の悲痛な叫び、敵潜水艦からの魚雷が本船に突進して来るというのだ。

昭和十九年五月六日正午、セレベス海ど真ん中での事である。大陸に駐屯していた我々は戦況不利となった南方第一線の補強師団としてハルマヘラ島に向かう途中であった。

四月十八日上海出港。蒸し風呂のような船艙に三千五百名の兵を詰め込ん

での航海で、既に途中で深夜僚船がわずか三分間の轟沈（ごうちん）で二千六百余名の海没を見ているので誰もが慌てたことであった。

次の瞬間「ドシーン！」という強烈な衝撃があり、多勢の兵が船底へ転落してしまった。船はたちまち右に傾きはじめた。脱出を目指して一挙に多勢が左舷の階段に集まったが、急造の木製梯子は衝撃で手摺りがとれてしまって掴まるところが無く、多勢が幾度も登っては落ちる状態であった。

傾いた右舷の梯子に向かう者は皆無で、本能的に高い方へ走ったのは皆同じであった。やっとのこと甲板に出られたが、やっと歩ける程度の傾斜で止まり、余力でゆっくり進んでいた。僚船の一隻は既に轟沈され、他の一隻も後部から徐々に沈んでいるようであった。

記録を担当していた私は書類を取りに戻りたかったが、既に下へ降りられぬ状態であったので涙をのんだ。三隻分の、一万とも思われる兵が山のようなうねりの中を浮きつ沈みつするさまは、異様というか悲壮というか身の毛のよだつ思いであった。船員の強い指示で浮胴衣を着け、兵の魂と教育され

た銃と剣弾薬を身に付けて飛び込んだ。

十四名の部下を集め護衛艦のボートに全員救助されたのは、日没の八時過ぎであった。

あの日あの時、大うねりの中、必死でボートを漕ぎ救助作業をした海軍さんたち。誰かが歌い出した「海ゆかば水漬く屍・・・」が一万の大合唱となった事。僚船が沈む瞬間「ばんざーい」という悲愴な叫び。そして舳先（へさき）を天に向け海に吸い込まれて行った巨船。空に残したわずかな煙りが、今でも私の頭から離れない。

少年の目で見た　終戦時の川田谷

砂川義信
川田谷在住

昭和二十年八月十五日、その日も暑い日が続いていた。

当時ラジオは唯一の情報源で、わが家も長兄が農業の傍ら近くの河川工事の人夫賃で買ったラジオが座敷の神棚の脇にあった。

前日かその日か、人々は「天皇陛下が、今日の正午のラジオで重大放送する」という話が流れた。

夏休み中の子どもらは、各家庭で飼育している乳牛を、暑さを避けるために近くの放牧地から太郎右衛門下の荒川に連れて行き、午後三時ごろ再び放牧地に戻すのが仕事である。

十五日は何故か、今の桶川市の運動公園入口付近に、卒業すると特攻隊に行くという飛行学校の見習練習生、子ども、それに近くの大人たちが集まっていた。この付近には大きな楢(なら)の木が茂りその所々にアメリカ軍機の空襲を逃れるために、黄色の練習機が隠してあった。誰に教わったのか、子どもらは自分の家から持って来た衣類等の洗濯物をドラム罐からガソリンを取り出し洗っていた。

多分午後一時ごろか、集まっている人々は雑談し、見習練習生が持って来た航空食糧のアメ菓子を食べていたが、その日、天皇陛下の放送がされたかどうか？ここに集まった人々は別段驚いたり悲しんだりした記憶はなかった。

それから月日が経ち、近くの飛行学校にアメリカ兵が駐留するという話が伝わり、数日後、本当に飛行学校入口の左側近くに三張のテントが張られ四～五十人の兵隊が駐留するようになった。

奥の飛行学校の中には、日本人の警備の人たちが見張っていた。

近くの人々は、アメリカ兵を一目見ようと県道から眺めていた。そのうち

に子どもらは、恐る恐る兵舎に近寄るようになり、誰言うとなく「シーガレット、チュウインガム、プレゼント、サンキュウ・・・・・」と次第に仲良くなった。

このころ飛行場の中程では、毎日黒い煙が空高く上がっていた。警備の人がいるので近寄ることはできないが、何か日本兵の大事な物資を焼いているという。戦時中、大石村の山中には空襲を逃れるために、多量の軍需物資が疎開していた。

そのうちにこの軍需物資を盗んだという話が伝わった。そのためか兵隊に行かない人々も軍服を着て歩き、私も長姉が荒川で拾ったという防寒服を着て夜遊びした覚えがあり、このスタイルが一時的にブームとなった。

これと前後してこの軍需物資を誰かが盗んだとか、一軒一軒アメリカ兵がピストルを持って調べにくる。盗んだものが見つかったら大変な事になる。

また、娘さんや若い嫁さんに危害を加えるとか、朝に晩に近くの人たちが集まり対応に苦労をしていた。

このように心配の日々が続く毎日だったが、日が経つにつれて単なる噂話に過ぎなかった。

川田谷地区は、今日のようにいつまでも変わらぬ日々が続いている。

敗戦の惨めさ　食糧難

宮内洋子
神明在住

昭和二十一年三月三十一日、やっとの思いで、中国青島（チンタオ）よりＬＳＴ（上陸用舟艇）で数日かかり佐世保に上陸、検閲を済ませ最初に手に入

った物は、茹でたさつま芋と、とてもすっぱい夏みかんでした。私たち引揚者に当てがわれた宿舎の前に農家の方か仲買人だかわかりませんが、売りに来たものでした。皆日本の食品が懐かしく、我れ先にと行列をつくり買いました。

外交官だった父は、外務省には戻れず、東京にあった我が家あたりは一面焼け野原になり、跡形もありませんでした。仕方なく母の里である四国川之江（かわのえ）に引き揚げました。幸いに父は当時の町役場（今の市役所）に努めることが出来ました。

早速配給品の麦や小麦粉、乾燥芋等受け取り、毎日の食生活が始まったのです。驚きました。外地にすんでいた者は内地がこんなにも食糧難であった事は全く知りませんでした。（海外日本人は日本の国を〝内地〟と呼んでいました）

引揚者ゆえに物々交換の品等手持ちがなく、祖母に着物その他を貰って、知らない農家を一軒ずつ歩き回り、食品に換えてもらったのですが、それも

長続きはせず、毎日の食事は水の多い麦のお粥(かゆ)、すいとん、干芋の煮たものだったのです。〝おなか一杯〟なんてとても無理な事でした。

転校試験を受け日本の女学校に入学出来て大喜びでしたが、それは苦しく辛い毎日となりました。そうです、お弁当なのです。母が気を遣って固めのお粥をアルミのお弁当箱に入れてくれたのですが、持って行くのもそっと持って行かなくてはならず、おかずもろくになく、本当に恥ずかしく泣きたい毎日でした。

今振り返ってみると、良く頑張ったと思います。高卒後生活もいくらか楽になり、私も上京して上の学校に入学できました。そんなにまでして学校だけはといって卒業させてくれた今は亡き両親に心から感謝しております。

戦争体験された方ならお解り頂けるでしょうが、戦争を知らない方には想像もつかないと思います。

人、それぞれの人生です。一人でも多くの方々に戦争の惨めさ、特に敗戦の惨めさを伝え、今日の、この平和で幸せな日々が永遠でありますように願

ってやみません。

私の戦争体験記

前田　猛
泉在住

私は昭和九年フィリピンのマニラ市で生まれました。父は植木商をやっており、我々家族九人は裕福な生活をしていました。

昭和二十年、私は小学校五年生で日本軍の兵器工場で働いていました。

数日後突然帰宅する様にと言われます。軍のトラックに乗せられ我が家に着

きました。突然疎開することになり、我々家族はすぐに帰って来られるものと思い、ナベ・米・カンズメ・カンパン・着替え・毛布等、一応家族が数日間食いしのげるものを家族それぞれがリュックに背負い、軍のトラックに乗せられ家を後にしたのです。父と長男は家に残りました。

数時間後に最初の疎開地に着きました。そこには数十メートルの細長いカヤブキの家があり皆それぞれが地面にゴザや毛布等を敷き、泊まることになります。食事は自分たちが持参したもので空腹を満たします。さて、再び山奥へと逃れることになります。この先はトラックが通れる道はありません。全員が歩いて行きます。次の疎開地はかなり高台にあり高床式の家屋が数件ありました。私たちは恐る恐るその集落に入りました。人影はありません。さて当時の食事は一握りの米粒と野草の粥です。また、家の中のアブラ虫、壁にかざられている動物の頭ガイ骨などを焼いて食べました。さて、米軍の〝B29〟による空襲も増々激しくなり、爆弾の投下、低空飛行での機銃掃射で道路に止まっていた軍のトラックも、数台燃えており、そのバリバリとい

う音で私は生きた心地もしませんでした。

ある日、突然父の死を知らされ私は防空壕の中で顔をひざにうずめ涙しました。さて私たちはどんどん山奥へ疎開して行きます。

数十日後、米軍のビラにより終戦を知りました。この数十日の逃避行の間、様々な生死をさまよう体験をしてきましたが、私たち家族が全員無事に帰国出来た事は、母の采配によるものだと母に感謝する次第です。

沃丁（ようちん）従軍記

小川敏治
泉在住

吾々（われわれ）は日ごろ気付かないが、平和と空気は有難い。

戦後五十一年、戦後生まれが国民の三分の二という。老兵は死し戦争は風化するが、憲法九条の国際平和は維持してほしい。

私は昭和十二年十一月五日、赤紙で東京第一陸軍病院に応召（おうしょう）。部隊長以下二百三名編成の野戦予備病院で大陸に出征、戦傷病兵の収容治療に任じ、在支（ざいし）十年、敗戦昭和二十一年六月二十日祖国帰還。私は戦争で青春を棒に振った。

明治生まれ昭和八年現役兵の私は〝沃丁〟。苦難の病院勤務の一端を断片的に孫たちに語り継ぎたい。

①昭和十二年の暮れ。蘇州の病院で多数戦傷兵の外、不衛生な環境で伝染病が多発、高熱に呻吟する患者に氷が無く、召集前東京で魚屋の冠城一等兵がクリーク(川)の結氷に着眼、取って来た氷で解熱看護効果抜群。病院長の目にとまり、一階級特進した。②当時戦友の番場勇氏が腸チフスで戦病死。遺体を空き地に運び、寝台に乗せ、上下に古材を積み注油、荼毘に付した。残酷だが、ほかに術なく、戦友の涙を誘った。祈冥福。③南京追撃で患者が激増。食事分配に容器不足。兵隊が徴発した木製朱塗り取手付き馬穴大の容器に飯を詰め、病室へ分配したところ、患者たちは大笑い。「それは華人の便器だ」に吃驚した一幕も。④星が物をいう軍隊で、慶応義塾大経済学部教授藤林敬三氏は二等兵で先生。部隊長海老原軍医大佐が生徒で経済学講義、正に陣中のエピソード。⑤昭和十三年春、日軍は徐州へ怒涛の進撃、五月十九日徐州陥落。私らは浦口の病院で、津浦線病院列車によって連日運び込まれる傷病兵収容に血眼で活躍したが、収容能力が限界。五月二十一日夕方、豪雨のなか三百八十七名の新患到着。収容不能、やむなく応急病室用に大型天

幕四張設営せしも、大雷雨で天幕は水浸し。夜を徹する収容作業。宿無しの重症者が何とも哀れだが、施す術がなかった。⑥安慶作戦で部隊が輸送船伏見丸にて長江遡江中、大通付近左岸より敵の猛砲撃。本船右舷の濁流に敵弾落下の都度、大きな水柱が上がる。間断なく飛来する追撃砲。七月十六日、吾が方焼付く甲板上に匍匐。小銃で応戦の心細さ。折良く援護機飛来、敵を沈黙させたが、まったく生きた心地は無かった。⑦吾が部隊は九江、瑞昌、武昌などに、病院開設。戦陣衛生の本分を発揮した。武漢攻略が熾烈になるにつれ、入院患者も激増した。崩れたシナ家屋の土間にアンペラを広げ、毛布一枚雑嚢を枕に、汗と埃に塗れた体を無言で横たえる患者が実に惨めで哀れだった。病院とは申せ、軍医の診断と投薬のみ。十月十七日、武漢三鎮は日軍に帰した。当時は瓦斯壊疽患者が多発し、手術室は火の車。目を回し死亡者も多かった。⑧私が不寝番勤務に服したある拂暁土民部落の病室巡視中「衛生兵どの」と細い声で力無く呼ぶのを聞き、急ぎ足で近寄り「どうした」と言葉を掛けたが、痩細った若い一等兵は瞑目のまま返事が無かった。マラリ

アの熱発患者で、額を濡れタオルで冷やしていた。傍の馬穴の水でタオルを搾り、額に乗せしばらく看取っていた。彼はかすかに「お母さん」と呼んだ後、燃差しの蝋燭が消える様に、自然に息が絶え静かに昇天した。彼の霊は故国の母親の許に帰ったに違いない。青白く栄養失調で骨張った顔が、本当に気の毒で堪らなかった。合掌。

もっと書きたいが、今回はこれで擱筆。私が無事帰還出来たのも、神仏のご加護と身内や世間様のお陰。只ひたすら深謝。

※　沃丁――赤い傷薬、沃度丁幾の略称　旧軍の看護兵(後に衛生兵)を沃丁と言った。

※　瓦斯壊疽――創傷伝染病。不潔な傷口に菌が入り、炎症を起こす。局部筋肉が急激に破壊され、ガスが発生し、臭気を放つ。

※　アンペラ――アンペラ草の茎で編んだむしろ。表面はなめらかだが堅い。

平成10年度
モンゴルに抑留されて

金子保夫
加納在住

満州（中国東北部）の黒河（こっか）よりアムール河を渡り、ソ連領に入ったのが昭和二十年十二月ごろであった。

五十年前の出来事をたどりながらの回想なので、記憶違いがあるかもしれないがお許しください。

シベリア鉄道で貨車に乗せられ、数日後、モンゴル国境に日暮れごろ到着。ここからモンゴル兵に監視されながらの必死の行進となった。

彼らは初めて日本兵を見て不安なのか、やたらと銃を空に向けて威嚇（い

かく）するように発砲していた。この日から二年間に及ぶ抑留生活が始まった。

夜明け近く、倉庫らしき建物に着く。私の中隊は最後尾であったため、すでに中は膝（ひざ）を抱え丸くうずくまっている人々でびっしりと埋まっていた。零下何度であったかわからないが、中に入りきれない人々は、足踏みをしながら寒さをしのいでいた。私はその時、〝外にいては凍死するかもしれない〟と思い、意を決して、人々の頭の上を踏みつけながら奥へ奥へと進み、建物の中へ入り、足が地面についたところで腰を下ろすことができた。今にして思えば、この極限状態での本能的な行動が生と死の境であったのだろう。

入隊以来の肉体的、精神的な疲労、食糧不足等で体力が限界に達していた。モンゴルに着いてから四月ごろまでに、多数の死亡者が出ているのは前述のような、つらい様々な出来事が重なったためではないだろうか。埋葬当番が廻ってくると屍室（死者を安置しておく部屋）に行き、二人一組で担架に乗

せて、幅約四十センチメートル、長さ約五十メートル程の細長い穴に裸のまま、次々と重ね合わせて埋めてゆく。死者はすべて解剖されていた。穴は夏の間に掘ったのであろう。死者の出身地、氏名はわからないが、骨と皮という言葉どおり、茶褐色になった枯れ木と化した死体は、これが二十代の若者かと目を疑うほど凄まじいものであった。そのころは、生きている者も明日は我が身と思い、死を悲しむ余力はなかった。

――私は、昭和十九年十二月十日に、世田谷の東部十二部隊に現役兵として入営し、北支派遣（ほくし）、弘兵団（ひろむ）、独立歩兵第三百九十大隊の一中隊に属し、終戦直前に満州に移動したため、ソ連軍の捕虜となり、モンゴルに抑留されることとなる。入隊時、四十六名いた私の同年兵は、昭和二十二年十一月十九日に函館港に復員するまでに、千葉県出身の諏訪一郎氏、唯一人となってしまった。諏訪氏とは、今でも文通している。前にも述べたように、出身地、氏名がわからないのは、落伍者が出れば補充するということで、混成部隊とな

ってしまったのが原因ではないだろうか。当時の上層部には、死亡者の記録が取られていただろうか。家族に死亡通知が届いただろうか、気になるところである。

半世紀にもなるのに、遠いモンゴルの地に埋まっている戦友たちは、墓標もなく土になってしまったであろう。

平和な日本で暮らす現在、これで良いのかと疑問を抱きつつ、今も当時の悪夢にうなされることもある。断片的な綴りで読みにくい点もあるかと思うが、共鳴できる所があれば幸いであります。

私の十一歳

砂川　春
川田谷在住

ウーッ、ウーッ、また今朝も空襲だ。

当時、国民学校初等科の私は、通学途中でした。母の手製の防空ズキンをかぶって、班長さんの命令に従い、大きな森に隠れました。そこには、小型の練習機が何機か隠されていて、とても不気味な感じがしました。低学年の子は、こわがって泣きわめきます。

ふと南方の空に目を向けると、編隊の飛行機が……突然低空飛行したと思ったら、バリバリバリと、機銃掃射の音が響きました。遠かったけれど、私たちは一斉に森の草むらに伏せました。こわかった。誰一人話もせず、し

ばらくこの状態で敵機の移動を待ちました。二時間位たったか、やっと空襲解除となり、登校しました。

学校は、すべて兵隊さんの生活の場となり、私たちはいつも青空教室で勉強しました。一教室に何冊もこない教科書、ノート、半紙等も無く、お習字はいつも新聞紙、又、お弁当は「麦ごはん」か「さつま芋」。なかには何も食べる物がなく、校舎の影で、そっと空腹をこらえている子もいたように思います。はき物といえば、家で作った粗末な〃わら草履（ぞうり）〃でした。若い男性は皆軍隊にとられ、どこの家も老人や母子家庭の生活でした。

私の家も、兄は兵隊に行き、姉がいつも早朝から足ぶみの〃縄ない機〃で、供出に出す縄をなっていました。足がとても痛そうでした。

どんなに苦しくても、つらくても、不平不満を言う人はなく、皆いきいきと学び、働きました。

「不自由を常と思えば不足なし」

「ほしがりません。勝つ迄は」

〝東洋平和〟という大きな目的に向かって、大人も子どもも、必死で頑張りました。

しかし、昭和二十年八月六日に広島へ、同月九日長崎へ、原子爆弾が投下され、両市は一瞬にして壊滅しました。そして八月十五日正午、重大放送ということで、家中してラジオを囲みました。とうとう日本敗るるの日が来たのです。

悲しい悲しい陛下のお声、みんな大声で泣きました。「泣いてどうする、平和を選んだ天皇陛下に従って生きるんだ。」「お蚕様に桑をくれろ！」大声での怒鳴りに大人たちは、泣くのを止め、仕事を始めました。一家を率いる父親の仁王様のような強さに、私は安心して友を訪ねて遊びました。

それからというもの、敗戦国日本は、衣・食・住、すべて不足し、更にきびしい生活が続きました。

こうした悪戦苦闘にもくじけず、しっかりと家庭を守り、立派に子育てしてくださった親・・・。

今、六十四歳の幸せな晩年に入り、改めて当時をしのび、子の親としての責にムチうち、今日一日一日と頑張るこのごろでございます。

平成11年度
私の青春

堂前絹代
若宮在住（当時）

旧制小学校を卒業し中学や女学校へと、また高等小学校へ、働く人も少なくありませんでした。女学校入学と同時に学生も国民服となり、リボンの制

服も夢と消え、しばらくはバレーボールや卓球、また、月よ花よと美しい唄など学生らしい生活も過ごしましたが、間もなくスカートがモンペに変わり、防空頭巾と救急袋を襷（たすき）にかけ胸には校章と血液型、氏名を記し、私たちの青春を待っていたのは「挺身隊」という名の「学徒動員」でした。

始めは薬品会社の包装や電線のハンダ付け等の仕事でしたが、やがて私たちは造兵廠（ぞうへいしょう）の点薬工場に移されました。某曹長という軍人の指揮の下、先生も生徒も一緒に働きました。広い工場には長い木製の作業台と長椅子が有り、私たちは向かい合って台の上に運ばれて来る、大量の機関銃の弾を五発ずつ接続させる作業でした。「雷管（らいかん）装着作業」といい、少女たちの細い指が左手で五発の弾をつかみ、同時に右手に装着の金具をとり一瞬で接続させる早業で、目の前の弾丸の山を崩して行きました。学生が熟練工となるのに一月とかかりませんでした。作業中空襲になると、一斉に声も出さず敏速に造幣廠内の防空壕まで急ぎました。壕内は、赤土のトンネルでどこへ通じているのか、広くて長くて照明も所々に有り、「東京の真下に

こんな所が」と声も出せずに誰もが驚き、顔と顔を見合わせました。地上も周りも火薬の山でした。先生も私たちも皆、口を真一文字に何も語らず、ただ「お国のために」と死を覚悟していました。やがて軍の方針で夜勤になり、休み時間には「速行（マラソン）」や「銃剣術」、そして「軍歌」まで猛教練。若い学徒たちも疲れ、作業中椅子からずれ落ち、そのまま眠り込み、友は互いに見て見ぬ振りで見回りの兵隊が来ると、足でつっついて起し合う無言の友情でした。

私たちの卒業式は「蛍の光」も唄うことなく、工場の片隅の静かな卒業式でした。戦争に始まり戦争に終わる青春でしたが、純白な心で互いに思いやる友情、そしていじめもなく、驕り（おごり）高ぶりもない美しい心で過ごした青春は私たちの誇りであり、全く「青春に悔いが無い」のが不思議にさえ思える今日です。

じゃがいもの味

山崎幸勇
坂田在住（当時）

私が旧ソ連邦の沿海州にあるトッタンという地図にも載っていないような山奥に、捕虜として収容され、伐採作業に従事していた時のことです。

ある日、指揮班からもう一人の捕虜と二人で、一日だけ民家の薪（まき）割りに行くよう命ぜられました。民家と言っても、収容所のすぐ近くにあるたった一軒の家でした。仲間の情報では、この住人は囚人で、私たち捕虜の伐採作業等の監督をさせるため家族共々この地に送り込まれているとのことでした。

二人は軒下にうず高く積まれた薪を夕方までかかって割り終わり、その家に一人いた五十歳ぐらいの婦人に告げました。

婦人は手招きで、半年も風呂に入っていない汚い二人を家の中に入れてくれました。

仄(ほの)かなランプの光に映し出された質素な家。

しかし、そこには二人が夢にまで見た家庭がありました。二人は感動のあまり、しばしその場に立ちつくしてしまったのでした。

婦人は、盆に盛ったピンポン球程のゆでじゃがいもと塩味のスープを「ご苦労様」と言うかのように、笑顔で勧めてくれました。

二人はもう餓鬼のように飲みかつ食いました。その旨(うま)かったこと、そして満腹したのは捕虜になって以来のことでした。

食べ終わって、二人は明々と燃える薪ストーブの前で、捕虜であることを忘れ、夢心地でおりました。だが、それも束の間、窓の外に見えるほの白い雪影に、再び奈落の現実に引き戻されてしまうのでした。

家を出る時、婦人は両手いっぱいのじゃがいもを二人に持たせてくれました。「スパシーボ、スパシーボ」。二人は何度も何度も頭を下げ、収容所に戻

ったのでした。

飢えと寒さの中、牛馬同然の扱いを受けてきた二人にとって、婦人のこの当然ともいえる行為がどれほど身に沁みて嬉（うれ）しかったことでしょう。婦人としても囚人の身、たとえ屑（くず）じゃがいもであっても貴重な主食であり、敵国の捕虜に与えてやる余裕などなかったはずです。

思うに、婦人は前の独ソ戦争で戦死したわが子を私たちの中に見ていたのでしょうか。

いずれにしろ、この得難い体験は私の脳裏に強く焼き付けられ、平和の願いと共に生涯消えることはないでしょう。

平和への願い

斉藤　勝
下日出谷在住

戦争も終わりに近い昭和二十年四月、父が国鉄へ勤務していた関係で、足尾線沿線の東村国民学校から神保原国民学校へ二年の時に転校しました。これまでは山村の生活でしたので、戦争への恐怖感はそれほどありませんでした。それでも米軍機Ｂ29の編隊が、上空に飛来しているのを見たり、米兵捕虜を足尾の収容所へ護送していくのを見たりしました。また学校では敵機の襲来に備えて、両手で目と耳を押さえながら、床に伏せたりした避難訓練などを頻繁に行ったりしました。

今度の学校は、隣村の七本木に飛行場があるためか、米艦載機は飛行場を

目標に襲撃していたようです。学校の校舎には、兵隊が駐留し、その関係で教室が足りず、児童生徒は午前、午後と二編成に分けて登校しました。それに空襲は日増しに激しく、授業中に警戒警報の発令が度々あり、児童生徒は直ちに帰宅させられました。そのため学校では、落ちついて勉強することができませんでした。

また、家に帰っても艦載機や爆撃機が飛来すると、すぐに母や妹たちと一緒に防空壕に逃げ込んだりした日が続きました。特に、空襲は夜間に多く、狭い防空壕の中は、暗く、雨の日や蚊に悩まされました。時にある夜、父に起こされて、駅から見た東京方角の空は、爆撃によるものか夕日のように赤々と染まり、空襲の激しさが今でも脳裏に焼き付いています。

しかし、暗い毎日であっても大人も子供も国土を守るためにと、お互いに助け合い、上級生は下級生を助け、下級生は上級生に従い、一致団結していました。当然、校内暴力や陰湿ないじめなどはなく、皆、困難に負けず頑張っていました。

今世紀も間もなく終わろうとしていますが、二十世紀は第一次、第二次と大きな戦争が二度ありました。また、各地で戦争や紛争も数多くあり、今日でも地域紛争は絶えません。二十一世紀は、戦争のない平和が訪れてくることを願うものです。

防空隊の末路

町田好市
坂田在住

戦局は愈々（いよいよ）緊迫し、サイパン・テニアン島も敵の手中に落ちた昭和十九年

夏。首都防衛の重責を担ったのは、東部一九〇四部隊、高射砲一一四聯隊（れんたい）一五中隊に配属された照空隊である。

大隊本部は月島にあり、我々の中隊は櫓中隊ともいわれ、又他に海上中隊、史蹟中隊の三個編成であった。櫓中隊は、名の通り洲崎海岸の遥か沖合の海中に太い材木を櫓（やぐら）に組み立てたもので、二千平方メートル位の広さがあったようだ。ここが中隊長の居る第一櫓で、又、第二櫓が五キロメートルぐらい西方に見える外、陸上に洲崎、桑川、堀井の三個分隊計五か所に照空隊が展開していた。

月島より入隊者約四十名。第一櫓に集合。適性検査を受けた部門は、照射、聴測、計測、通信等である。照空灯は直経一メートルぐらいの凹レンズで、小指の太さぐらいの炭素棒のアーク灯であり、十万燭光（しょっこう）だという。又、聴測の聴音器はトランペット様の大型ラッパが四個、天空に向いている。その適性検査は、ブザーの音の方角を判定するもので難しいものだった。これは、航空機の位置を音で追尾してゆくもので、高性能の航空機にはとてもついて

ゆけぬ代物で、間もなく姿を消し、チ号(電波探知機)タ号(電波標定機)に取って変わられた。

私は通信士として手旗や電話通信の訓練を受けた。B29が首都上空に見えたのは、確か昭和十九年十二月二日だったと記憶しているが、偵察らしい一機だった。私はちょうど二十年三月十日の大空襲には、桑川の衛兵当番で三名で詰めていた。夜半、警戒警報の発令があり、私が受話器を取った。気の抜けたころ空襲警報が発令され、第一櫓の中隊長の号令が受話器を通して入って来た。私も緊張してその号令を大声で全員に伝える。突如いつもと違う耳も裂けるような轟音と共に次々B29の来襲である。高度も三千メートル以下という超低空で魔物のように侵入してきたのだ。隣接した桑川高射砲隊も狂ったように連続撃ちを始めた。腹に突き上げるような衝撃音が伝わって来る。これが本当の修羅場というものかも知れない。「各個照射」の号令が耳に響いた。今夜のような場合、各隊の連携プレーは不可能なのだ。本所深川等下町に火の手が上がり、折からの西風と上昇気流に煽(あお)られ火の海と化したの

だ。

電話の向こうより「一つ軍人は忠節を盡(つ)くすを本分とすべし」と軍人勅諭が流れて来た。その声も悲壮を通り越し、為すすべもなく諦めの感じすらした。高射砲隊も戦果が幾らあったのか、深川木場の貯木場に一機残骸を見たが他はあまり聞かない。

日本の主な都市は悉(ことごと)く灰燼(かいじん)に帰し、防空隊の無力さを痛感したが、将来愚かなる戦争は絶対すべきでないと子々孫々に伝えたい。

平成12年度
異国の衛生兵

金子武義
川田谷在住

昭和十六年十二月六日。衛生兵として川崎駅発。何処へ行くとも分からぬまま、着いた所は荒涼たる北中国。二ヵ月余り厳寒の中、軍人基本教育。その間軍隊特有の筆舌に尽くし難き制裁も受け、三月一日に済南陸軍病院に配属。この病院は米国の財閥が大学病院として創立したもので、軍が接収して使用したのです。広大なる敷地。通路も碁盤の目の如くアカシヤ並木に囲まれ、本館、病棟、礼拝堂、宿舎、点々と石造りの豪壮なる建物でした。勤務者は軍医兵、看護婦約三百人。患者は約二千人。直ぐに衛生兵の教育が始ま

り、人体構造、看護、薬物、病理(患者の汚物検査)等、超特急教育のため消化不良で身につかず、後半には筆記試験が度々。前夜は夜半まで一夜漬けの勉強。そして三ヵ月が終わると庶務、経理、薬室、病理、病棟、炊事、軍医当番、農園―と、適材適所へ勤務。小生は薬室で現在は包装薬ですが、一人ひとり調合するので時間がかかり、分からぬことがあるので古兵に伺うと、「教育を受けて来たのだろう」と怒られた事も度々。そして薬室、病理、経理勤務者は、伝染病棟へ夜勤がありまして、一夜を宵番暁番制とし、暁番は熟睡する間もないので辛かった。結核室では便、喀血、痰の始末。戦前は不治の病として恐ろしかったのです。夜食も食べる気持ちにならなかった。でも常勤の看護婦は小生より年下が多いので、「そうだ」と心に鞭打ちして勤務した。赤痢室では排便が度々。便器とあちこちから「拭いてもまた頼むよと細き声、肉無き尻に哀れみつのる」、便が手に付いた時もありました。

チフス室でうたた寝してると、日直軍医が巡視に来て氷枕の補給が遅いと怒られた。軍隊は運隊、夜勤せぬ勤務科もあったのです。夜勤しても日直し

ても翌日は平常勤務。苛酷な勤めにも耐えねばならなかったのです。宵番し月を眺めながら故郷では盆たお祭りだと思い出したが、ましてや異国の地で肉親にも逢えず、ベッドの上のまま同室の友の亡くなるのを見た時の兵の心境は、如何ばかりかと想像しました。

昭和二十一年四月に無事復員し、四十年には「済南病院勤務者の会」が発足し、年一回温泉地で開催しております。何十年振りでお会いすると万感胸に迫り、涙する人もあります。全国から百人以上集まることは、済南会の絆の深いことを悟りました。小生も出来る限り出席してます。短い時間ですが当時の気持ちに戻ります。そのため新幹線に度々乗車することが出来ました。読みにくいと存じますが体験の一端です。病院の沿革・写真や会の資料は少し持っております。

食糧難をのり越えて

森　敏五郎
末広在住

戦争体験記とは申されませんが、戦争が残した爪跡の一部を戦争を知らない世代に伝えたく投稿しました。

兵隊は戦地で、残された家族は戦争という二文字に置かれ、お国のためとは申され、現代の若い世代には想像もつかない苦労があったに違いない。終戦当時、私は六歳。八人兄弟の五番目として暮らしておりました。昭和二十年五月、私の母は戦渦に巻きこまれ、哀れにもこの世を去りました。私は母に対する愛情にも充分満たされず育ちました。

当時暮らしておりました千葉県浦安町にも、Ｂ２９が投下した爆弾、そして

焼夷弾。街中は火の海と化し、燃え盛る火中で仲よしだった友を数人失いました。私にとって母、そして友達、言葉では表すことの出来ない悲しい出来事でした。

終戦、そして数年後、兵隊も続々と復員し始めたころから、今度は、食べ盛りの私たちに空腹の旋風が襲いかかってきたのです。地域によっては異なるでしょうが、当地浦安あたりは、季節によりましては魚介類は獲れましたが、腹にたまる穀類などほとんどなく、あってもとうもろこしの粉ぐらいでした。くる日もくる日も空腹で、とうとう人様が食べている物をひったくって食べたこともありました。また、飢えを凌ぐため、悪いこととは知りながら友達と野荒らしをして、野菜を煮炊きして食べたこともありました。後に聞いた話だが、畑を荒らされたお百姓さんは、子供たちのすることは見て見ぬ振りをしていたそうです。今考えますと、何と心の大きな持ち主のお百姓さんだろうと想像します。また、申し訳ない気持ちでいっぱいです。食べ物だけでなく母を亡くした私は、衣類も今では考えられないボロボロの衣服を

身に着け、シラミはたかり、見るに見かねて同級生のお母さんが、「私の息子のお下りだけど」と言って何枚も着せてくれました。その同級生のお母さんも数年前に亡くなられたそうです。生存中は、私は恩もありますので、何度かお礼はいたしましたが、私にとりまして、やはり母のように思っていた方が亡くなり悲しい思いです。

農家にとって大切な農作物をぬすまれても、見て見ぬふりをしていたお百姓さんの心の大きさ、同級生のお母さん、人間という一番大切な人様に対して、優しい心の在り方について学ばせて頂き、戦争があっての出来事で矛盾する面もありますが、私には生涯忘れることの出来ない思い出です。現在の子供たちにもあのような悲惨な戦争で、誰が一番犠牲になるのかをもう一度語り継ぐ必要があると感じます。

結びに、当時のお礼の気持ちを込めて、二、三のボランティア活動に参加させていただいております。ありがとうございました。

思い出の地

前島芳春
東在住

昭和二十年三月、沼津海軍工作学校卒業。私ほか数名は翌月の四月、重い衣納袋を背負って桜も満開の沼作校を後にした。

着いた所は大阪の淀川べりにある神武第五四三二工場でした。大阪はまだ敵機の来襲は少なく「撃ちてし止まん」の精神で町はまだ活気づいていた。私たちの任務は当兵器工場内外の警備である。昼、夜の交代勤務で警戒警報が発令しない限り、二階の窓から淀川を挟んでの夜景は奇麗だった。

それから昭和二十年六月～七月ごろと記憶しています。空襲が激しくなり、大阪も大きな被害を受けたのでした。焼夷弾爆撃により、風上の火災の煙で

昼間でも十四～五メートルも離れると、人の姿さえ見えない程でした。煙により涙は出る、咳は出る、呼吸は苦しく手拭は鼻から放せなかった。その翌日の午後またも空襲警報が発令された。間もなく私たち兵舎の真上で「ザザザザー」と焼夷弾の落ちる音。いよいよ来たか。火災となっているのは兵舎の東側の鐘紡工場である。出動命令が下った。消火に倉庫内の物資(織物)の搬出に懸命な活動が始まった。あっ子供だ。「お母ちゃん、お母ちゃん」と泣き叫んでいる。物資搬出の途中救護班へ通報。「今、お母ちゃんが来るからね」の言葉に涙で汚れた顔が大きくうなずいた。

空襲警報発令中のある日の午後のこと。同僚の派遣先の巡視に急ぐため、焼け野が原と化した中の道を橋川兵曹長と共に歩いていると突然、艦載機の機銃掃射を受けた銃弾が「バチバチバチ」と何かに当たる。またの銃弾を避けるため、付近の墓地に暫く身を隠した。艦載機は旋回北方に立ち去った。

それから梅田駅から一キロぐらい離れた所だったと記憶している。ある散髪屋さんに一度お世話になり、二度目に行くと防空壕暮らしをして居る。話

を聞くと「空襲で防空壕に避難して居たとき、すぐ脇に一トン爆弾が落ち、命は助かったが家はない。」と涙ながらに話してくれた。九死に一生である。勿論このとき多くの方が亡くなったとのこと。確かにその脇には直径十メートルぐらいの大きな穴が空いており付近一帯はガレキと化していた。

ある日の夕方、巡視の帰りにいつも歩いて渡る、名も忘れた淀川に架かる橋の中程まで来ると、橋川兵曹長が「おー前島あれを見よ」と指差した。大阪城である。立ち並ぶ家屋で見えなかった大阪城が焼け残って夕日を受け、遠く薄黒く寂しそうに周囲を見渡しているように見えた。橋川兵曹長の目の下が夕日にきらり。思えば橋川兵曹長は茨木市の出身。この辺の地理に詳しい方だけに悲しみが余計に増したのかも知れない。

そして終戦。残務整理。衣食住に苦しむ近所の方たちに僅かではあったが食糧等を分けてやり、皆さんの健康と復興を祈って母校の沼作校へ戻った。

戦争は悲惨です。平和を祈ります。

平成13年度

戦争の悲惨さを繰り返してはならない

安川　武之助
川田谷在住

私は当年とって七十九歳です。本当に筆無精で、手紙をもらっても返事を書くのに苦労します。でも、どうしても戦争の悲惨を身をもって体験した一人として後世に伝えておきたい、この一念で下手な文を書きました。

私は昭和十七年七月、現役兵として内地の教育隊に入隊し、三か月の教育を受け、昭和十七年十月満州の飛行隊に行きました。そして終戦後はハルピンでソ連の捕虜となり、関東軍の将兵は北満牡丹江の旧日本軍兵舎に集められ、捕虜生活が始められた。

まさか捕虜になるとは夢にも思っていなかった。戦争が終わったので、すぐにでも内地へ帰れるとばかり信じていたのです。ところが、ソ連の命令で千名単位で作業大隊を作れとの事。わたしたちの部隊の大半は第一一七作業大隊を編成した。

そして十月十五日、牡丹江駅から貨車に乗せられました。行き先・作業の内容等は全く知らされませんでした。この時点でも内地へ帰れるものとばかり思っていた。一週間くらい汽車は走り続けて下車となった。着いた所は雪が積もっていた。「これは、いかん。えらい所に来てしまった。」三、四日歩いて着いた所が捕虜収容所です。それから鉄道建設の作業が始まりました。

なんといっても冬は零下三十～四十度くらいまで下がる寒さ、食糧不足と質の悪さには、若いわたしたちは何とか持ちこたえたけれども、年をとった人や病弱の人はわたしたちのいた〝テルマ地区〟だけでも千名近く亡くなりました。「異国の丘」の詩歌のとおり、いつかは帰れることを夢に見つつ生活したのです。私は幸いに二年半くらいで帰ることができましたが、五年、六

年といた人が大半です。

平成七年九月、捕虜生活をした場所へ、亡くなった人の遺族の方と共に墓参に行って来ました。五十年余り経った今も現地はあまり変わっていません。わたしたちが飢えと寒さに耐え、建設した鉄道等は立派に残っています。ソ連もシベリアの奥地までは手がまわらないのでしょう。

わたしたちの人生の中で戦争そして捕虜生活は長くはなかったのですが、この悲惨な思い出は本当に忘れることができません。このような事が次の世代にあってはならない。お互いに平和を守り、一生懸命がんばっていきましょう。

平成14年度
学童集団疎開を引率して

中山郁子
（故人　当時若宮在住）

私は、昭和十七年から四十二年間教職にあり、最後は川崎市立東小田小学校長として定年を迎え、今日に至りました。昭和十七年に着任した時は、先生方が防空演習をしていて緊迫した雰囲気でした。すでに戦況は悪化していたのです。昭和十九年（１９４４年）、時の東条内閣は「学童集団疎開」を閣議決定しました。

学童疎開は縁故疎開（親戚知人）を原則とし、縁故のない学童は集団疎開を実施。その時点では初等科三年以上六年までということで、その細部が示

され、これは強制であり、教職員も学童とともに共同生活をする。これを拒否することは許されませんでした。

昭和十九年八月末、私は三年生の担任で、子どもたちとともに伊豆長岡の旅館で生活することになったのです。食糧不足で狩野川の土堤に野びる等の野草を摘みに行き、食事は常に雑炊でした。蚤虱（のみしらみ）にも悩まされました。ところが空襲が激しくなると米軍のB29が伊豆半島の上空を通過するようになり、危険だということで翌二十年六月、再疎開の命令が出て、富山県西礪波（となみ）郡西太美村才川七、宗善寺というお寺が宿泊所となりました。福光という町から八キロぐらい歩いたでしょうか、山奥の村です。

富山県は有名な米どころですが、疎開学童に対しては副食品等すべて配給でした。村長さんは立派な方でしたが、私は助役さんの案内で村の一軒ごとに味噌をもらって歩いたあの屈辱を忘れることができません。

受け入れた村も迷惑だったことでしょう。子どもたちを連れて松林に行き、松根油採取の作業をしました。その頃はもう航空用燃料がなくなっていたの

でしょう。

昭和二十年十月末、東京へ帰ってきましたが、児童の中には空襲で両親を失った子もいました。遠く親元を離れて耐乏生活を送った子どものけなげな姿を想いうかべ、今でも涙があふれます。戦後の生活はどうやって生き延びたか、語りつくせないものがあります。

平成15年度
戦争覚書

湯本嘉次
朝日在住・当時上平村在住

昭和六年、満州事変が勃発、翌年、満州国が成立して、日本は中国大陸への進出に沸いていました。小学校に来た大佐ぐらいの軍人が、南京、上海など都市の攻略状況を地図でわかりやすく説明してくれたり、村に演習に来た兵隊の機関銃の狙撃訓練などを目のあたりにして、私たち少年は、戦争という出来事を身近に感じ、日本軍の強さに感心し、また、軍人にあこがれました。当時、現在のホンダ飛行場のところに陸軍の川田谷飛行場があり、農作業をしていると、畑の上空を「赤とんぼ」と呼ばれた赤い二枚羽の練習機が

飛んできて、爆音を立てて宙返りや旋回の練習をしていたことも、私たちの憧れを増幅しました。

高等小学校を卒業すると、男子は青年学校に入校して軍事訓練を受け、村の運動会には決まって軍事教練が披露されました。出征する家の庭先には、「祝、出征、誰々」と書いたのぼり旗があがり、出征の日には、村長、国防婦人会、青年学校の生徒、各種団体、親戚などの見送り人が大勢集まり、出征者は、出征の決意を述べた後、万歳、万歳の声に見送られ駅に向かって行ったのです。

昭和十七年一月、私は、一旦、千葉県の佐倉の部隊に入営し、一か月後、北シナ(現在の中国北部)に派遣されることになりました。佐倉では、夜中に出発したにもかかわらず大勢の人が集まって日の丸を振って送ってくれたことに感動し、軍人として恥じぬような行動をしようと、心の中で固く誓ったのを覚えています。広島県の宇品港から朝鮮半島の釜山に上陸して一泊し、満州経由で、山東半島の少し内陸の済南市郊外の泰安に着きました。

私の中隊は、師団の予備隊で、いわゆる戦闘要員であり、実際の戦闘にも数多くかかわりました。当時、中国大陸の主な都市は日本軍に制圧されてはいましたが、今考えて分かることですが、まさに点と線――都市と鉄道――を抑えただけのものであり、広い大陸では、占拠した地域の周囲には、いつも中国兵が出没し、常時、戦闘にさらされている状態でした。

目的地を攻め込むために、各地の軍隊が集結するときの行軍、特に夜行軍は最もつらいものでした。一週間ぐらい昼夜を徹して行軍したことがありました。何百キロも歩きました。夜行軍は疲労に眠気が加わって、油汗をにじませながら、ふらふらと、ただ夢遊病者のごとく歩き続けます。寝ぼけながら歩くので、前方の者が止まっても気づかず、前の者の背中の鉄兜に頭を打ち付けて、ふっと目がさめる。立ち止まると、また、立ったまま眠ってしまう。前の者が歩き出しても気づかない。後ろの者が肩をたたいてやっと気づいて歩き出す。前との距離が開いてしまうため、追い行こうと駆け出しますが、これがまた辛いものでした。

早朝、全部隊が集結し、山ろくの部落に潜む敵兵めがけて擲弾筒（てきだんとう）を撃ちこむのを合図に、戦闘が開始されます。擲弾筒がさく裂して黒煙が上がる。敵兵、村人が逃げ出す。これを狙い撃ちする――一瞬の戦いです。そして敵の陣地を占領して部落掃討作戦となります。自分の部隊に犠牲者が出ることも多く、目の前で上官や戦友が倒れます。兵士は常に自殺用の手りゅう弾を所持しており、捕虜になりそうなときなどは、自殺すべしと教えられていました。戦友の身柄を収容に行ったとき、手りゅう弾で自爆したと見られ、足２本しか見つからないこともありました。

あれから五十八年もたっていますが、兵隊にあこがれていた少年時代のこと、あの中国大陸での死と隣り合わせの軍隊生活と、戦友たちのことを思うと胸が熱くなります。また、戦中戦後の食糧や物資のない生活を思うとき、現在の平和で豊かな社会をありがたいと身にしみて感じます。

※　川田谷飛行場―正式には、〝熊谷陸軍飛行学校桶川分教場〟で、少年飛行兵の訓練施

設。現在のホンダ飛行場付近に滑走路があり、川田谷の太郎右衛門橋の上流側高台に兵舎があった。戦後、兵舎は中国大陸からの引き揚げ者や戦災者の住宅として使用された。

※擲弾筒（てきだんとう）―歩兵用携帯火器。小型爆弾や照明弾などの打ち上げに用いる。

平成16年度
東京大空襲

本木茂子
加納在住

三月十日の東京大空襲のことは、いつまでたっても忘れることはできませ

ん。私の叔母は、東京の下町、三ノ輪橋の近くで和菓子店を営んでいました。十日の夜中、たくさんのＢ29が東京上空にやってきて、大量の焼夷弾を落とし、今の江東区、台東区などの下町は、まったくの焼け野原になりました。桶川からも東京方向の空が真っ赤に染まって見えました。

翌日の朝早く、私は、おにぎりなどの食糧を持って、桶川駅から東京に向かいました。上野行きは、救援に行く人たちで大混雑していましたが、列車にぶら下がるようにして、やっと尾久駅に着きました。普通は上野の駅から常磐線に乗り換えて行くのですが、そのときは、列車が通っていなかったので、高架の常磐線の線路の上を歩いて行きました。あの辺りは、鉄道のガードが多く、あたり一面家が焼かれ、道は避難する人や救護する人でいっぱいのため、人々はガードの上を歩いて避難していたのでしょう。ガードの上も、避難民でごった返していました。火災はほとんどおさまっていたと思いますが、周りの家はほとんどが焼けてしまって、遠く浅草の方まで見渡せるようでした。線路の上を通って遠くに逃げようとして、火にあぶられてしまった

人も多くいたようです。苦しんでいても、それに声をかける余裕はありません。けがをしたか、力尽きたのか、多くの人が、線路の上に倒れていました。見るも無残でしたが、私は目をそむけながらも、それを、またぎまたぎ歩くしかありませんでした。残酷なように聞こえますが、そのときは、ただ、ただ、一刻も早く叔母さんのところへと急いでいて、他人をかまっていられる状態ではなかったのです。もう、無我夢中でした。あのときの気持ちは言葉では言い尽くせるものではありません。

叔母さんの家の付近でガードの下に降り、夢中で探しました。偶然にも、叔母さんたちは、ガードの入口付近にいました。「良かったぁ」。叔母さんと姪は、貴重品と家財道具のミシンを持ち出していたように思います。ガード下も避難してきた人でごった返していました。幸いにもガードの入口にいて、見つけることができたのです。おじさんは、配給か何かを取りに行っていたようで、その場にはいませんでした。

叔母さんの家に行ってみました。既に和菓子店は焼失していましたが、持

ち出し忘れたものを、まだ、焼けないで残っていないか、懸命に探しましたが、大した物は残っていなかったように思います。その頃は空襲に備えて、既に桶川の実家に箪笥などの家財道具は、何回か運んで来てありました。私は、叔母さんとリヤカーや荷車で、何回も東京から桶川まで歩いて運んだ記憶があります。その晩、おじさんも帰ってきて、どこかの施設に泊まったように思います。

私は、一人で日暮里か尾久駅から列車で帰ってきました。帰り道、焼夷弾が落ちた大きな穴を見たのを覚えています。

あれから五十九年になります。物がたくさんあって何でも手に入り、そして、平和な今。でも、あんな時代がありました。あの時のあの状況は、見た人でないと分かりません、とても言葉で話せるような光景ではありませんでした。

※　東京大空襲――昭和二十年三月十日未明、東京上空に侵入した三三四機の米軍の爆撃

機Ｂ２９が、まちの隅々まで隙間なく爆弾を落とす。じゅうたん爆撃”を行い、墨田区、江東区、台東区付近一帯が、まったくの焼け野原になった。木造家屋の密集した街並みと折からの二十～三十メートルに及ぶ強風、深夜の超低空からの焼夷弾(しょういだん。建物に火をつけるための爆弾)攻撃が重なって、被災者百万八千人、犠牲者推定十万人。

昭和20年4月5日桶川飛行場

柳井政徳
北本市在住

私は大正十五年生まれで、昭和十二年ごろから川田谷にあった熊谷陸軍飛行学校桶川分教場に、昭和十六年一月から昭和二十年五月初めまで整備員として勤務していた。

桶川飛行場は、熊谷にあった陸軍飛行学校の分教場で、召集下士官や少年飛行兵、特別操縦見習士官などの操縦訓練をしていた。初心者用の通称「赤とんぼ」という複葉の飛行機が十六、七機あり、数か月に一度、五十～七十人の学生が入学してきて、気象学、航空工学や基本操縦を学んでいた。生徒・学生、本部兵舎の事務職員以外に、飛行場には、飛行機の整備班、燃料担当

の補給班、格納庫内の雑務を担当する庫内班などがあったが、整備班は、技術将校を筆頭に、三十人ぐらいいたと思う。

初練、中練という操縦の基本を教える学校であったが、時には、高等練習機による高度な操縦を教えることもあった。学生は、ここを卒業すると、福岡県の大刀洗（たちあらい）飛行学校や外地の飛行場で、実戦機の訓練に入った。

昭和二十年ごろになると、桶川分教場は、特攻隊の訓練基地も兼ねるようになり、私は、特攻練習用の九七式戦闘機や九九式高練（高等練習機）など、実践機に近い飛行機の整備担当となった。各地から特攻隊を編成した隊員が来て、特攻攻撃の訓練を行っていた。訓練は、滑走路から今の本田航空の事務所に向かう途中の堤防上に立っていた吹き流しをめがけて急降下し、また急上昇していく繰り返しだった。

戦況がいよいよ険しくなってきた昭和二十年四月五日、特攻隊員十二人が知覧から出撃することになった。整備のため、私たちも九九式高練に同乗するよう言い渡された。指名されたのは、整備担当の藤原曹長と整備員五人で

あった。隊長の訓示、別れの酒のあと、十二機のうちの六機の後部座席に乗った。特攻隊が出発することは秘密のはずであったが、うわさを聞きつけて周りの堤防の上には、見送りの人たちが来ていた。荒川の上流に沿い、北に向けて飛び立った。眼下には、冬枯れの薄茶色の地面の中に、黒く蛇行する荒川が見え、太郎右衛門橋の上では、おじいさんらしい人が大きく日の丸を振り、ほかにも数人が手を振っているのが見えた。息子か孫でも出征しているのだろうか。私たちは、旋回して戻り、飛行場の上を超低空で飛んで見送りの人たちに左右の翼を振って別れの挨拶をしたのち、十二機は、西に向けて飛んで行った。戦争に行って死ぬのは当然と思っていた当時、私はどんなことを思ったか、今思い出すことはできない。途中、岐阜県の各務原（かがみがはら）飛行場に一泊し、下関に近い小月（おづき）飛行場に向かった。

私は、京都出身の山本少尉の飛行機に同乗したが、京都の町に入ったとき、大きな煙突だったので、風呂屋だと思うが、二階の物干台の上で家族らしい人たちが日の丸を大きく振っていた。私の飛行機は、驚くほどの超低空飛行

で煙突の周りを二、三回まわり、翼を大きく振って別れの挨拶をした。学徒出陣で、学生からいきなり特別操縦見習士官として入隊して将校となった二十二歳の青年が、故郷の空をどういう思いで飛んだのか、胸中を察するに余りある。

小月飛行場に着いた私たちは、翌日朝、試運転を終わって飛行機を隊員に引き渡した。アクセルを吹かした飛行機の爆音の中、山本少尉は、車輪止めをはずし終えた私を操縦席に呼んだ。「柳井、世話になったな。整備班に帰ったら、みんなによろしく伝えてくれ」。私たちは列車で帰ってきたが、隊員たちは鹿児島県の知覧基地に向かい、記録によると、四月十六日、第七九振武隊として、沖縄の海に散ったということである。

桶川から飛び立ち知覧基地から出撃した十二人の寄せ書きが、今も知覧の記念館に残されている。桶川から特攻隊が出たのは、私が記憶しているのは一回だけで、その後あったとは聞いていない。

※熊谷陸軍飛行学校桶川分教場――「桶川教育隊」ともいい、太郎右衛門橋の上流側高台に本部兵舎があり、現在の本田航空の滑走路とほぼ同じ位置に滑走路があった。下士官操縦学生、少年飛行兵、特別操縦見習士官など、昭和十二年から二十年までの間に推定一五〇〇～一六〇〇名の航空兵が学んだが、特別操縦見習士官一期生だけでも八十数名中、四分の一近くが戦死するなど、卒業後の進路は悲惨なものであった。

※特攻――陸軍(海軍)特別攻撃隊のことで、二百五十キロ爆弾を抱いた戦闘機などで、操縦士ごと敵艦に体当たりする攻撃方法。沖縄戦での特攻戦没者だけでも、陸海軍合わせて二六二〇人。桶川分教場出身の飛行兵の遺書も残っている。飛行機や燃料が足らなくなってきていた昭和二十年四月十六日、陸軍は、初めて練習機を特攻に出撃させた。第七九振武隊、山田信義隊長、山本少尉らの九九式高練(高等練習機)十二機、桶川飛行場から出発した特攻機である。

平成17年度
3月10日東京大空襲

伊藤宏子
西在住

昭和二十年三月十日は、私にとって生涯忘れることのできない日――東京大空襲のあった日です。墨田区本所亀沢町に両親と、姉二人と妹と住んでいた私は十三歳で、日進国民学校高等科の一年生でしたが、毎日、勤労動員のため、都電に乗り、亀戸にあった藤倉落下傘工場に友達と通っていました。警戒警報の回数も多く、敵の飛行機が空から住民をもダッダッと撃ってくるような騒然とした世の中で、子どもにとっても、気分が重苦しく沈んだ感じで、電車の中では話もせず、ただ無言で乗っていたように思います。

三月九日の夜中の十二時ごろ、二階に寝ていた私たちは、鳴り響く空襲警報と、父の「公園の方に逃げろ」という声で目を覚まし、驚いて外を見ると空が燃えるように真っ赤でした。私たち一家は防空頭巾をかぶって外に飛び出し、私は、母と手をつないで永倉公園の方に逃げましたが、逃げ惑う人波にまぎれ、いつのまにかはなればなれになってしまいました。公園に着くと、姉たちとは出会えましたが、母の行方は分かりません。公園そばの防火用貯水槽で、一番上の姉は拾った布団を水で濡らし、あられのように体に吹きつける火の粉を払いのけてくれましたが、布団が水の重みでどんどん沈み、それにすがっていた姉も沈んでいきました。それを見て、思わず私も飛び込んでしまいました。家々が燃え盛る熱で熱くて、水に飛び込む人もたくさんいましたが、大人がやっと立てるくらいの深さで、私はもがきもがき、セメントのつなぎ目に爪を入れて顔を出し、冷たい水の中で、じっと助けを待っていました。辛くて心細くて、こんなとき母がいたらと、心の中で母を呼んでいました。私の後ろで、「〇〇ちゃん死んじゃった」と叫ぶ声が聞こえてきま

した。何とかして貯水槽から這い上がろうとする人が、私の背中の救急袋をつかむので、私はずるずると、水の中に沈んでいきました。と、誰かが手をとり私を引きあげてくれました。一番上の姉でした。姉も苦しみながらやっと水から這い上がり、もがいている子どもがいるので、かわいそうに思い、引きあげてみたら私だったそうです。

朝になり明るくなると、まさに、辺り一面焼け野原で、昨夜私が落ちた貯水槽には、何人もの人が浮かんでいました。幸いにも父と出会い、四人姉妹は再会しましたが、母はそこにはいませんでした。

着のみ着のまま、歩けるはずのない距離を上野駅まで歩きました。途中、やけどを負って動けない人たちから、「田舎に連れていってください。」と、うめくような声で懇願されました。しかし、どうすることもできません。あの人たちはその後どうなったのか、私は戦後、長い間気にしていました。

父は、私たちを菖蒲町の実家に預けて焼け野原の東京に戻り、毎日毎日母を探しつづけましたが、ついに母を見つけることはできませんでした。言い

ようのない寂しさ、悲しさ、苦しさ、全部しょい込まされてしまった戦争。
戦後六十年、世界は一日として平穏な日はありません。戦争のない世の中が来るよう祈ります。

昭和20年3月10日東京本所廐橋

中村成夫
鴨川在住

私は、昭和十三年東京本所廐橋(うまやばし。現・墨田区本所)で生まれ、父はそこで畳業を営んでいました。あれは、昭和二十年三月九日の深夜、ちょうど

私が七歳になった誕生日の晩でした。ラジオが米国機一機来襲と伝えました。それから何分も立たないうちに空襲警報が鳴り、大爆音とともにＢ２９爆撃機が何百機も低空で飛んできて焼夷弾を東京の下町一帯に投下しました。

私は隣に住む同級生と、通っていた明徳国民学校(現・区立本所中学校)の講堂に避難しましたが、いつもの空襲とは違うと感じた父が迎えにきて、母と一歳の弟、叔母と私の四人を連れ、火の中を隅田公園の方へ向かいました。

あちこちから火の手があがり、空は真っ赤に燃え、強い北風で隅田川対岸の浅草方面から飛んでくる火の粉が雨のように降りかかり、体中熱くて熱くて肌が剥がれそうに痛かった。父はかぶっている鉄兜(てつかぶと)を脱ぎ、隅田川の水を汲んできてはみんなにかけましたが、数分で乾いてしまいます。向島や浅草方面からも人々は家財道具を背負い、荷車を引いて、いっせいに隅田公園の方へ逃げて行きます。ものすごい多くの人たちが地獄の炎に吸い込まれていく。今にもこの世が終わるのではないか、そう思いました。

夜があけて十日朝、隅田川や言問橋(こととい)の上は焼死体でいっぱいで

した。なんと、鉄の橋が燃えているのかと思ったのは、橋の欄干に人が重なりあって倒れ、衣服に火がついていたのです。つまり、人が燃えていたのでした。荷車を引いていた牛や馬も死んでいました。一歩一歩あゆむごとに足元にころがる無残な死体。みんな男女の区別もないくらいで、子どもは人形を焼き転がしたようになっていました。あの光景、あの時の気持ちは、六十年後の今も脳裏から離れません。

汽車も止まっているので、私たちは荒川の土手を歩き母の生まれ故郷、川田谷村八幡原(はちまんぱら)の実家に向かいました。身の回りのわずかな荷物しか背負ってきませんでしたが、お櫃(ひつ)ごと持ってきた芋の入ったご飯を荒川の土手で食べ、川田谷についた時はもう夜中になっていました。

母の実家も、長男、次男が召集され働き手を失い、曽祖母、祖父母に長男の嫁、叔父三人と預けられていた私の四歳の弟の八人家族の生活は苦しかったようで、何も持たず着のみ着のままで逃げてきた私たちは、実家とはいえ歓迎されませんでした。東京の家が何もかも燃えてしまったという話の時で

しょうか、祖母は、冗談のつもりだったのでしょうが、「体まで燃やしてきてしまえば良かったのに」、そうつぶやいたのを私は今でも覚えています。母の耳にも入ったかどうかは分かりませんが、子ども心に傷ついたことを覚えています。このことは、母が亡くなるまで私の心にとどめて置きました。でも、誰もみな、自分たちが生きるのにやっとで、家を切り盛りしていた祖母は大変だったのだと思います。

八月十五日に戦争が終わって、私は翌年一月、川田谷小学校に編入し、実家には昭和二十三年までいて、その後二十四年から三十一年初めまで、村のあっせんで旧桶川飛行学校の兵舎に住みました。父母は実家の畑を借り、飛行場の跡地を開墾してジャガイモやサツマを作り食糧を確保しました。

日中・太平洋戦争の犠牲者三百万人の上に今の平和があります。日本は絶対に戦争をしてはなりません。軍人が政権を握ってはいけません。今、私はそう思います。

忘れられない兄

岡安智恵
川田谷在住

私は、大正十四年、栃木県那須郡野崎村の生まれです。四人兄弟の長兄、渡辺茂正は北海道の室蘭高等工業を卒業して国鉄職員になりましたが、昭和二十年三月十七日に、硫黄島で玉砕しました。三十二歳、陸軍大尉でした。

出征する前に兄は私に、大好きだった『浜千鳥』の歌を教えてくれました。

青い月夜の浜辺には
親を探して鳴く鳥が
波の国から生まれ出る
ぬれた翼の銀の色・・・

硫黄島に行く前、昭和二十年の一月か二月だったかと思いますが、帰省したとき、私は「あんちゃんが来た」と大喜びをしました。帰省したときは、いつも一泊だったのに、このときは二泊だったので、私は子ども心にどうしてだろうかと思ったことを覚えています。硫黄島に行くことは家族に話しませんでしたが、その後の父への手紙にも、自分の恩給は、年金のない母にやってくれと言うようなことが書いてあったということなので、このとき既に戦死を覚悟していたのではないかと思います。

私たちは、兄のために千人針をつくってあげました。白い布に、赤い糸で結び目をつけるのを大勢の人に頼みました。近所の人たちや街頭で、ひと針ひと針縫ってもらい兄に持たせました。五銭は死線(四銭)を越え、拾銭(十銭)は苦銭(九銭)を越えるという縁起にあやかって、五銭玉や十銭玉も縫い付け、無事に還れることを祈りました。しかし、帰り際、兄が言った「智恵、俺に会いたいときは、靖国神社に来い」という言葉が、最後になってしまいました。

戦死の公報は、戦後、役場から届けられ、村葬も終わりましたが、私たちは、兄はずっと内地勤務のはずだと思っていましたので、兄の死は信じられませんでした。私が栃木県の氏家税務署に勤めていたとき、戦争のことを書いた文章の中に、戦友として兄のことらしい内容が書いてあったのを同僚が発見し、その人を探しあて、終戦後二年ぐらいたってからその人にきてもらい、兄のことをいろいろ話してもらいました。

「戦地では水がなくて苦しみましたので、仏様には、たくさん水をあげてください。軍刀はきちんと埋めて来ました。お兄さんは、戦死したことは間違いありません。」

私たち家族は、初めて兄の戦死を信じたのです。

手元に、兄が現地に発つとき、面会に行った人に託した私宛の手紙が残っています。

「智恵子よ。何もお前たちにできず、申し分けない。みんな仲良く協力して、人生を乗りきってください。いつまでも苦しいときばかりあるものでは

ない。そのうちに幸せがくる。兄も自分に与えられた任務に全力で尽くしてきた。今後もそれを続行するのみです。皆さまの健康を祈ります。お父上様、お母上様に良く孝行を尽くすように。一金百円也を送る。何かに利用してください。」

この手紙を、私は戦後六十年間大事に持ち続けてきました。兄さん、これからも私たちを見守ってください。

※　硫黄島玉砕――小笠原諸島の島。本土防衛のため島民から徴用された軍属や少年兵を含む二万千名が配置された。昭和十九年三月二十二日組織的戦闘終結。戦死者二〇一二九名、生還者一〇三三名。

※　千人針――一片の布に千人の女が赤糸で一針ずつ縫って千個の縫玉を作り、出征将兵の武運長久・安泰を祈願して贈ったもの。日清・日露戦争の頃始まり、初めは「虎は千里走って千里を戻る」の言い伝えから寅年生まれの女千人の手になったものという。

あれから60年

筧　芳江
朝日在住

私は、桶川市に移り住んで十一年目を迎える主婦です。昭和二十年三月十日、私は六歳でした。私の家は東京深川の高橋五丁目にあり、足袋の問屋をしていました。両親と兄、姉と弟、私の六人でしたが、その日は前日にもうひとり、次兄が新潟の疎開先から帰ってきていました。

三月九日の夜中、零時を過ぎていたと思います。米軍のＢ29爆撃機の大群が東京の上空に襲来し、何百万発という焼夷弾を投下しました。私たちはいつものように近くの防空壕に逃げ込みました。父は町内会の班長で大切な書類を持ち出さなければならなかったため、私たちは父を後にして家を出まし

た。しかし、この夜はいつもと違うと感じた母の判断で、どこかもっと安全なところに逃げようと――と言ってもどこに逃げてよいか分かりませんでしたが――人々の流れにのって隅田川に流れ込む運河に架かる高橋(たかばし)という橋の方に向かいました。

高橋の上は逃げ惑う人々で大混雑しており、あちこちから立ち昇る炎と降ってくる火の粉で空は真っ赤でした。上の兄の誘導で、私たちは離れないように互いに手を握りあっていましたが、雑踏の中でいつの間にか次兄とはぐれてしまいました。私たちは名前を呼び必死に探しましたが、あたり一面の炎と降って来る火の粉の中を逃げ惑う人たちで、とても見つけることはできません。あつくて熱くて、人々は水を求めて川に殺到していました。川岸も人々で押し合いへし合いの混雑でしたが、そこにも炎が迫って来ました。

私たちは川面に浮かんでいる筏に逃げることにしました。材木問屋の多い深川には、昔から川には筏が浮かんでいました。しかし、筏を繋いでいる縄に火の粉が燃え移り筏はバラバラになってしまうありさまで、次々に安全な

ところを探して逃げなければなりません。私と姉の髪に火の粉が降って来るので、母は水をかけてくれました。母の背中では一歳の弟が泣き叫び、もうとても逃げ切れないので川に飛び込んで死のうと母は言い、姉は川に飛び込みました。「いや、生きられるだけ頑張るんだ」十二歳の兄の言葉に私たちは勇気付けられ、兄は姉を引き上げました。

家族の前に大きな船が通りかかったので、周りの人は先を競って船に乗り込みましたが、私たちはとてもそこまで行けずに冷たい水の中でもがいていました。まもなく、船は川の中央に進むと、見る見るうちに沈んでいきました。

それからは、どこをどう逃げたのか覚えていません。朝まで、まさに地獄の戦いのようだったと思います。空が明るくなりました。幸い、私たち家族は、助かることが出来ました。高橋の方に戻って迷子になった次兄を探しました。

ところどころに煙が立ち昇り、人の焼け焦げた臭いと煙、足元は真っ黒焦

げの死体、死体の山でした。もうやけどやケガで助けを求めている人はいなかったように思います。死体をシャベルのような物で車に乗せている人たちがいました。そして、生き残った家族は、一人ひとり死体をひっくりかえして我が子を探していました。その様子はすさまじく、母も名前を呼びながらそうやって兄を探しました。もう焼け焦げて、顔はもちろん男も女もわかりません。母の兄をさがす姿は、今でも目に焼きついて忘れることはできません。兄は見つかりませんでした。学童疎開から帰って来るのがあと一日遅かったらと、母が悔しがっていたのを覚えています。弟は、母の背中でねんねこ半纏(ばんてん)に火がついてお尻に大きな焼けどを負い、もう少しで死んでしまうところでした。幸い、父は近くの小学校にひとりで逃げていて無事でした。

戦後、私たちは千葉県佐原の父の遠い親類のところに疎開しました。都会育ちの私たちにはなじめない生活で、いじめにも合いました。来る日も来る日も食べ物はカボチャとジャガイモ。一日も早く東京に帰れることを願って

頑張りました。父はまもなく疎開先の病院で亡くなり、母も煙が元で失明し、昭和四十九年に亡くなるまで辛い日々が続きました。

あれから六十年、兄は元気でいれば、今年で七十歳になります。三月十日を命日として、毎年、残された家族で思い出話をしています。平和であることを感謝し、元気で残された人生を頑張りたいと思っております。

※　運河は「小名木川」

幼い目から見た戦争体験記

森　敏五郎
末広在住

太平洋戦争の真っただなか、私は幼年だったが、あの戦争の悲惨さは六十年経った今でも脳裏から忘れ去ることはない。当時、私は千葉県東葛飾郡浦安町に生まれ住んでいた。

昭和二十年三月十日の未明、父が声を荒げて、東京の深川が、Ｂ29が投下した焼夷弾で街中が大火になっていると話した。父に手を引かれて江戸川に架かる浦安橋の上まで見に行った。西の方角を見渡すと、無数の火柱に包まれた東京下町では全面火の海。折からの烈風にあおられて、夜空を焦がす紅蓮の炎、この世のものとも思われないその光景を襲い掛かるように火の粉が

飛び交う橋の上にたたずみ、じっと見つめた。

六歳の私にとっては大切な、優しい、まだまだ甘えたい母が病に倒れ、昭和二十年五月、終戦目前に、冷たく暗い防空壕の片隅で医師にも診察してもらえず息を閉じた。この暗黒な戦争さえなければ、若くして命を落とすこともなかったのではないかと思われる母の死。息を引き取る母の姿をじっと見つめる幼い私。六歳といえば物心がついてまだ日が浅く、目の前の出来事を完全に理解することは、できなかったように思う。しかし、敗戦を目前にした戦争末期の最悪な環境の中で、若い命を閉じた母の死は、私にとって、我が家にとって、本当に悲しく切ない出来事であった。

けれども、私たち家族より幾倍も、いや幾十倍もの悲しみと苦しみを戦争で受けられた方々も大勢おられる。そうした方たちの中には、戦争での心痛が余りにも深くて大きいため、戦争体験記の募集があってもペンを取ることのできない方が少なからずおられると思う。「戦争さえなかったら……」と心底からほとばしる戦争体験者の嘆きの言葉が示すように、戦争が無数の

人々にもたらした不幸の数々は、筆舌に尽くしがたいものがあり、その罪悪は計り知れない。

暗い過酷な戦争が終わり、明るい平和が我が国にもたらされ、はや半世紀、私たちは今、平穏で幸せな生活を送っている。あの打ちのめされた敗戦の日の荒廃した空の下では、想像することすらできなかった豊かな恵まれた暮らしがある。

しかし、当時六歳の幼い私の目に焼き付いた戦争の悲惨な映像の数々は、決して色あせることなく、成長するにつれて、戦争に対する強い憎悪と怨念に凝縮した。戦争は、遠い歴史の一コマではない。反戦平和の堅い信念を持って、この原稿をしたためた。

平成18年度
戦争のない平和を願う一人として

金子　美代子
末広在住

私は昭和十二年生まれの六十八歳です。東京の江東区北砂町に住んでおりました。小学一年のときでした。戦争という地獄を体験しました。

昭和二十年三月十日、空襲警報発令のサイレンと共にＢ29の爆撃機が爆弾を雨あられのように落としてきました。家はもちろん、燃える物は何もかも焼けてしまうのです。ちょうど近くに池がありましたので、両親が私と弟二人とまだ生まれて十日目の乳児を抱え、池に飛び込んだのです。それでも髪の毛が燃えてしまうので、父が池の水を掛けてくれました。私は助かりまし

たが、池の中に入れなかった人たちも大勢おりました。周囲は火の海でした。地獄の沙汰です。気がついた時には、まったくの焼け野原となっていました。周りには真っ黒に焼けて大勢の人が亡くなられておりました。

母は、産後の体で水の中にいたため、腰が抜けて立つことができませんでした。父がリヤカーを見つけて来てくれましたが、タイヤは焼けてありませんでした。私たちを乗せましたが、私のすぐ下の弟がはぐれてしまい見つかりませんでした。その後、半年経って施設に預けられていることがわかりましたが、乳児と三歳の弟は煙を吸って亡くなりました。

その後、王子に移り、また空襲になり今度は飛鳥山に逃げたのです。飛鳥山には防空壕が幾つかあるのですが、どこも一杯で入れませんでした。また、B29が爆弾を雨あられのように落としてきました。そのとき、私は母に「死にたくない。死にたくない。」と泣きながら逃げ回っていたそうです。爆弾が当たらなかったのが不思議なくらいでした。その時は、家族全員無事でした。東京で二度の大空襲にあいました。

その後は、母方の祖父の実家の新潟に行き、終戦を迎えました。今思えば、戦時中は毎日脅えていたように思います。学校では、勉強よりもいつ空襲になるか分からないので、逃げる訓練ばかりしていました。

今の日本は平和です。この戦争の無い平和がいつまでも続いてほしいと、心の底から願うばかりです。

「平和」　なんと素晴らしい言葉だろう

藤森巳代
市内在住

私は当時、山梨県の須玉町(現在の北杜市)に住んでいました。

昭和二十年四月の早朝、役場より電話で父に「明日より海軍の兵隊を８名泊めてくれ」とのことで、我が家は急に四室が宿舎となり、ほかの二十名ぐらいは学校を宿泊所としました。二日後には、勤労奉仕の人と海軍の兵隊さんが山で松の根を掘り、釜で煮詰めて松根油を作り軍の資源にしました。当時、両親の身内の真砂町(現在の文京区本郷)と荻窪の二家族が離れに疎開しており、夕食後は皆で美しい星空を眺めている中、兵隊さんが古里の歌や家族の話を楽しく聞かせてくれました。

また、婦人会の人と母は戦地へ送るため供出された梅を樽に漬け込み、時々、戦場に向かった兵士の留守家族を慰問して歩きました。戦争は日々厳しくなり、食糧は不足ながらも食べることができましたが、7月には甲府の大空襲で夜と言うのに東の空が真っ赤になり、その下を逃げ惑う人々を思うと、子供心に戦争の恐ろしさを忘れることができません。

やがて、八月十五日の終戦。ラジオの前に兵隊さんと両親が座り、戦争が終わったことを話してくれました。兵隊さんは隊へ帰り、その後十年ぐらい実家との文通もありましたが、世の中も自然と平和を取り戻しました。

戦後、両親の知人が巣鴨の拘置所に収監され、面会に行ったことがあったが、昔、近衛兵だった父は、「戦争というものは、平和の影に必ず犠牲者のいることを忘れるな。」と、教えてくれました。

東池袋の中央公園の横に、永久平和を願ってと石碑が建ててありますが、近くを通ると当時を偲び、平和の有り難さを痛感します。

昨年、古里は北杜市になりました。家の近くには世界一を誇る増富（ますとみ）ラジウ

ム温泉があり、当時、松を掘った山の木々は今、緑豊かな大木となり、美しい〝みずがき湖〟にその雄姿を映しています。

時代が変わろうと戦争のない、子供たちの健やかな成長と、いつまでも世界平和と幸せの続くことを願わずにはいられません。

※　松根油――松の根株または松枝を蒸し焼き（乾留）して得られる油。ペンキ・ワニスなどの溶剤に用いる。日本では第二次世界大戦末期に「航空機燃料」としてつくられた。

続　いのちの伝言

―　私の戦争体験より　―

初版第一刷発行　平成十八年（２００６）
初版第二刷発行　平成二十八年（２０１６）

編集・発行　桶川市市民生活部自治文化課
桶川市泉一―三―二十八
０４８（７８６）３２１１